

## 新島襄の英文書簡と山本覚馬と 宣教師の出会い

森 永 長壹郎

この資料紹介を書き上げたところで、ふと思うことがある。今出川の図書館が改築されると聞かすが、それを機会に山本覚馬を顕彰して「覚馬図書館」と名づけてはどうかと思った。『天道溯源』を読んだ覚馬のキリスト教に対する理解とキリスト教主義学校設立を志し「同志社」という名称を提案した覚馬の思いを切実に感じたからである。

インターネットと IT 技術の進歩により新島研究関連の外国に所蔵されている古文書や古書籍の公開を始め、新島遺品庫資料公開や同志社大学学術リポジトリにおける同志社大学関連の学術出版物の公開がなされ、自宅からのネット検索による新島研究の遂行が可能な時代になってきた。筆者が関わってきた J. D. Davis のアメリカン・ボード文書はアメリカのハーバード大学の図書館へ寄託されて、その一部が当時毎月アメリカで発行されたボードの情報誌 *The Missionary Herald* に掲載されており、活字化されて自宅から閲覧できるようになった。日本でのアメリカン・ボード（以下 ABCFM と略記する）伝道が始まった 1869 年からの ABCFM 誌の合冊製本、第 65 卷（1869）から第 76 卷（1880）まで Davis に関する閲覧調査を行った。その結果、今まで同志社で知られていなかったと思われる新島襄が兵庫県有馬から 1875 年 7 月 7 日にハーディー夫妻へ出した手紙の大部分<sup>1)</sup>が見つかったので、著者の拙訳とともに全文を紹介すると共に、同志社設立に重要な山本覚馬と宣教師達の出会いについて述べたい。

この新島の手紙は今まで、『新島襄全集』第 8 卷<sup>2)</sup>に触れられているが英

文は示されず、ごく一部が Kyoto からの手紙として *Life and Letters of Joseph Hardy Neesima*<sup>3, 4)</sup>、『新島襄全集』第 10 巻<sup>5, 6)</sup>に掲載されていたが、新島の書簡としては認識されず『新島襄全集』第 6 巻（英文書簡編）には一部<sup>7)</sup>しか収録されているにすぎなかった。

この手紙<sup>1)</sup>は新島がハーディー夫妻へ、1875 年 4 月に京都へ入り、再度 6 月にデイヴィスと共に山本覚馬に会って同志社のスタートになる校地を購入する経過や覚馬がキリスト教を理解した経過など、新島の京都でのスクールの設立の目的が出来たことを、京都からではなく有馬から報告したものである。

また、覚馬と宣教師との出逢いに関して *The Missionary Herald* 誌からは 1872 年に日本の内陸部へ立ち入ることが可能となった京都博覧会に ABCFM の宣教師が第一回京都博覧会開催中の京都での短期の居住が可能になり、その後毎年開かれた博覧会に第 4 回まで京都を訪れ新島が会う以前に山本覚馬に会ったことが宣教師達の報告から知ることが出来る。

1869 年にグリーン (D. C. Green)、1871 年にギュリック (O. H. Gulick) とデイヴィス (J. D. Davis)、1872 年にベリー (J. C. Berry) 続いてゴードン (M. L. Gordon) が日本へ派遣され、彼ら最初の 4 名は 1872 年の第一回京都博覧会以降毎年京都を訪問して、京都における ABCFM の伝道ステーションとトレーニングスクール設置を模索し、1874 年に新島襄がアメリカから準宣教師として帰国し彼らに合流して、1875 年 4 月に新島が京都を訪問したのち、デイヴィスと共に山本覚馬との面会が実質的な同志社英学校のスタートに繋がった。

*The Missionary Herald* Vol.67, July (1871) ; Vol.67, October (1871) ; Vol.68, September (1872) ; Vol.68, October (1872) の Japan Mission の欄に、最初に彼らが京都に滞在した経験を、N. G. Clark へ報告<sup>8-15)</sup>したことが掲載されている。このあたりの事情を示す先行研究は河野仁昭論文<sup>16)</sup>、鏑木路易<sup>17)</sup>論文、ポール・F・ボラー (著) 北垣宗治 (訳) 『アメリカンボードと同志社 1875-1900』<sup>18)</sup>と本井康博 『アメリカン・ボード 200 年 - 同志社と越後における伝道と教育活動』<sup>19)</sup>に詳しい。

筆者は 1872 年の宣教師達の手紙<sup>12-15)</sup>から覚馬と宣教師との出会いの経過

を以下の3つに分けて説明したいと考える。

## 1. 1872年の山本覚馬とギュリック (O. H. Gulick)、 デイヴィス (J. D. Davis)、ベリー (J. C. Berry) との 会見

ギュリックは1871年3月18日付けの神戸からの手紙<sup>9)</sup>で2月26日 America 号で横浜へ到着、横浜ではヘボン達と会い、1871年にヘボンが京都を訪れたことを聞いたのであろう、商業的な観点から京都での伝道の必要性を最初に報告している。そして蒸気船 New York 号で3月1日に横浜を出港し3月3日神戸着を果たして他の宣教師達に合流した。

1872年6月15日付けのデイヴィスからクラーク (N. G. Clark) 宛ての手紙<sup>14)</sup>によるとデイヴィス、ギュリックそしてベリーが京都を訪問した時、ベリーが医療宣教師であるところから日本人の医師のグループに歓迎されたことを報告している。しかしこの日の山本との会談についての内容の詳細な報告はギュリックとベリーに任せており、山本との会見については後述のギュリック<sup>12)</sup>とベリー<sup>15)</sup>の手紙に示されている。

次にその時の会見について、まずデイヴィスの手紙<sup>14)</sup>に従うと、

ベリー博士はその直前まで日本語の勉強のことを思い、日本人学生に教室で教えることを考えているうちに、明らかに脅迫神経疲労の兆候で苦しみ大変だったが、山本との会見の時は回復していた。京都の医者仲間がベリーを待っていた。医者たちはベリーから医学 (medical science) を学ぼうとした。次いで京都府顧問の山本との正式な会見にあたり、山本の好意を得る手段の一つとすることとして、彼が苦しんでいる発作を治す処方することであった。彼の影響によって市の知事 [長谷信篤<sup>21)</sup>] と権知事 [檜村正直] との会見がすぐに許された。これらの高官によってベリーは敬意と親切な思いやりをもって受け入れられ、この市の貧しい人々や病人が彼の仕事と関係ある施療院のことを知るなら感謝の念をもって受け入れられると考えられている。ところが残念なことに、中央政府の制限のために今のところ外国人はこの市に永久には (permanent) 住むことが出来ないのだ。ベリーが「この市に博

覧会の終了後、中央政府の制限が存在し続けるならば、私が滞在することは黙認されないのか」と質問すると、一瞬当惑した山本の答えは東京の政府（江戸の中央政府）に不服の申し立てを送り、市は外国人が住まうために永久に開かれるべきであると要請しているとのことであった。

次は O. H. ギューリックの手紙<sup>13)</sup>である。

### 神戸 1872年6月15日 O. H. ギューリックから N. G. クラークへ

最初に述べたパーティから神戸に戻って10日間、ベリー医師はリウマチ熱を出して大変な病気になるが、今では回復している。・・・神戸に家を持つはずであったが、彼の赴任先の京都の医師グループから手紙を受け取った。彼が現場に到着すると医師のグループによって宴会が開かれて、医師らは明らかにこの機会を利用して彼から医学を学びたいと希望していた。彼は知事に手紙を書いて会見を要請したが、すぐに許しが出た。

通訳の助けを借りてベリーは知事に、この市に施療院を開くことについての思いを伝えた。彼はここに建設される病院が医師を雇っていないことを知ると、病院で自分の立場が得られるかもしれないという希望を持ち、宣教師の仕事を進めさせられるかもしれないと希望を持った。

知事によると、市議が中央政府に、京都は外国人に開放されないのかと尋ねているが答えがまだ来ていないとのことであった。知事は病院の医師 (hospital physician) の面会の日を決めて、彼が病院で働くことを望んでいるのなら更に話し合う約束をした。決定的なことは何も決まらなかったと言ってベリーは神戸に帰って行った。

京都の中央部分に位置した所に、この3家族が家を借りて住み3週間になるころ、日本人の知り合いも広がり、言葉も使っているうちに日常会話にも慣れてきた。博覧会も残すところあと20日程になったとき、この期間（第1回京都博覧会 1872年3月10日から5月30日まで、会場、本願寺、知恩院、建仁寺）が切れた後、京都に残るためには何をすることが必要なのか。それは全くはっきりしていなかった。

学校 (teaching school) のために政府と何らかの約束をせざるを得ないとギューリックは思った。しかし何か月も前に政府とのそのような取り決め、

契約は必要ないと思っている。市の支配者 (rulers) たちは宣教師が滞在できるためには何をすべきか、心に準備していることを発表した。彼らの提案はギュリックが欲している目的を効果的にするためには政府から名目上の約束を取ることだという。

京都で第3位にいる役人 [京都府顧問：山本覚馬] と医者 of ベリー、デイヴィスとギュリックとの間での話で、役人が言うに、政府はまだキリスト教を紹介するのは許可していない。それ故、ギュリックは現在のところ人々に説教することを始めることはできない。ギュリックが答えて、許しが出るまで説教はできないが、もしも人々が自分の家に来るなら、キリスト教について話すことはできるとのこと。家で説教はできるが公に説教することはできない。そして、日本はまだ開かれていないが長くしないうちにキリスト教がたぶん許可されるであろうということであった。

われわれが京都に落ち着くことは多くの注目すべき、好意的な神の意志が心にとめられている。即ち適当な地域に家を得て影響力のある人々との中に心のこもった知り合いを得ると言うこと。しかし少しでも京都の中に住まいを求めることで宣教師の動機の素晴らしさを評価されるものである。

この段階では京都でのトレーニングスクールの考えはあったが、同志社英学校の創立についてのアイデアはまだない。

## 2. 1875年の山本覚馬とゴードン (M. L. Gordon) との 会見

ここで最も大切なことはゴードンが山本に『天道溯原』を渡したということである。

この事実はゴードン自身によって、日本を離れてボストンに帰り 1901 年に出版した *Thirty Eventful Years*<sup>21)</sup> の第4章の「京都ステーションと同志社」に、新しく認識された本題の新島の手紙<sup>1)</sup>の引用と共に、加えてデイヴィスの手紙を引用して記述している。その文章には Dr. ——と名前を伏せているが、新島とデイヴィスの手紙には Dr. Gordon と書かれている。筆者はなぜゴードンが自分の名前を出さずにいたのかに対して、新島やデイヴィスの

手紙を引用の際に、自分自身の名前を Dr. (博士ではなく医師) という称号のみを使い名前を使うのを躊躇したためではないかと推察している。ゴードンの謙虚さを示しているのであろうか。

新島は手紙<sup>1)</sup> (有馬から帰国後の報告としてハーディー夫妻に送った 1875 年 7 月 7 日付) の中で、ゴードンが覚馬に対してキリスト教について、大して話はしなかったが『天道溯原』 *Evidences of Christianity* を 1 冊山本に与えたと書いている。この本は中国に派遣された宣教師 [M. A. P. マーチン] によって中国語で、説得力のある、興味ある本である。改宗させることに於いて日本では聖書よりも大きな働きをした。何故なら、聖書は理解するのに難しい。聖書的表現でつまずいて本当の意味を理解できない人もある。『天道溯原』は教養ある人や懐疑心のある人には打って付けの本で福音の真理に注意を払い人生と光を探し求める人に役立つ本であった。ゴードンは日本人にキリスト教を理解してもらうために説明すべき正にこの人こそという点を衝いた。何故なら、最高に教養のある思想家の一人にキリスト教に関する説得力のある書籍を与えたのだから。

ここから新島は手紙<sup>1)</sup>でハーディー夫妻に山本の紹介を始める。彼は歩けないし、盲目であるが、心は澄み切っていて鋭い。ゴードンが『天道溯原』を渡した後しばらくして新島は彼を訪問した。その時、山本は『天道溯原』について語った。「この本は優れている。大いに役にたった (it has done me great good.)。キリスト教についての疑問をはっきりさせてくれた。彼が発見した難しい問題を解く方法はキリスト教にしかないということが分かった」とのこと。山本は「無意識のうちに、求めていた道を見つけ、夜が明けた (The day has dawned upon me.)」と告白している。

山本とゴードンとの会見についての先行研究として『改訂増補山本覚馬傳』<sup>22)</sup>によると、ゴードンが山本へ『天道溯原』を贈った時期は 1875 年 3 月末から 4 月の間と考えられるとしている。その時期、ゴードンは前年同様京都博覧会の機会に京都に家を借り静養も兼ねて滞在して覚馬達と交流していた。また、新島が大阪でキリスト教主義学校の創立に失敗し、西京旅行を行った時期でもある。新島が山本に会ったとき、山本が『天道溯原』について話をしていることは、ゴードンが新島よりはやく山本に会っていたことは明

らかであると『覚馬傳』は述べている。さらに、『新島襄全集』第8巻<sup>23)</sup>によれば、1875年4月上旬、新島は初めて京都を訪れ榎村正直京都府参事の紹介で山本に会い、学校設立について相談する。山本はゴードンから贈られた『天道溯原』について話し、キリスト教による人心の改善を説き、キリスト教による学校の設立を勧めたとある。

### 3. 山本覚馬と新島襄、J. D. デイヴィスとの会見<sup>1)</sup>

新島<sup>1)</sup>によると、「この興味ある真理を求める人物・山本覚馬は肉体的には盲目であるが、知的な目は盲目ではない。この人物が言うように、福音が京都で公に説かれなければならない。山本は新島とデイヴィスに京都にトレーニング・スクールを創立するようと言う。新島とデイヴィスは盲目の人物の会社〔開拓会社<sup>23)</sup>〕が所有する天皇の下臣を教育するために一時的に学校として使用されていた校舎の土地を校庭のために買った。静かな場所で天皇の旧邸から数歩 (a few steps) のところだ。権知事・榎村正直は上京中のため、新島は榎村が帰洛するのを待って、京都政府に嘆願書を出し、キリスト教が教えられる学校を創立する許可を得たい」と述べている。

デイヴィスは N. G. クラークへの手紙<sup>24)</sup>により山本所有の 5.5 エーカーの土地を 550 ドルで学校の敷地として購入したと書き送っている。一方新島<sup>23)</sup>は「開拓会社所有之地所」と書き残しているが、竹内力雄氏の調査<sup>25)</sup>によると「山本所有」を裏付ける資料は存在しないとのことである。

そして新島は山本と結社し、1875 (明治 8) 年 8 月 23 日付で「私塾開業願」を知事に提出し、9 月 4 日、文部省に認可された。11 月 29 日、官許同志社英学校創立となる。この日は新島が帰国して安中の両親に正式に帰国の挨拶をした日の丁度 1 年目に当たる。

以上のことから筆者が学んだことは、ABCFM の宣教師達と山本の出会いは初めから同志社英学校創立のためではなく、日本の内陸地、特に古の都・京都での学校設立が目的であった。第一回京都博覧会の後も引き続き京都に滞在して、京都が外国人に開かれるのに備えると言う姿勢がみられる。1875

年3月末から4月初旬に、山本はゴードンから『天道遡原』を贈られた。ここにゴードンのキリスト教伝道の意図が見て取れる。そしてゴードンに会った後、山本が4月に横村正直（京都府参事）に紹介された新島に初めて会い、最終的に新島とデイヴィスとの会見で覚馬の同志社英学校創立の意図がはっきりと表れているということである。3年にわたって基礎を積み上げた結果、さらに覚馬が京都に英学を学ぶ新しい学校を作りたいと思っていたことと新島がキリスト教の学校を作りたいと願っていたことにより、官許同志社英学校創立が可能になったと言うことである。

## LETTER FROM MR. NEESIMA／新島氏からの手紙

Neesima Letter\_1875-7-7 [アンダーラインの部分のみ『新島襄の生涯と手紙』に掲載されている。<sup>3-6)</sup>]

[*The Missionary Herald* Vol.71-October (1875) p.298-9.]

新島氏からアメリカ合衆国の友人達 [Hardy 夫妻] への日本の有馬から7月7日付の手紙には京都の将来性や真理という大義に非常に親しみのある盲目の京都府顧問 [山本覚馬] に関して更にいっそうの情報を与えてくれる。新島氏は以下の様に書いている。

さて私が皆さんに語らねばならないことは、我々宣教師の努力に対して京都の門戸を開いてくださった京都の勇気のことです。皆さんがご存知の通り京都は1869年まで数世紀の間、天皇の御在所であったし、帝国では3番目に大きな都市でした。代々の天皇は我々の宗教である神道の最高権威者であり、仏教の後援者でもあります。京都には非常に多くの寺院がある故に、京都は上記の宗派の拠点と見なされてきました。

私が大阪に来て、ある宣教師 [Gulick か?] が京都に入ろうとした事を聞いた時、私が思ったことは『京都がキリスト教に開かれる最後の地となるかも知れない』ということでした。しかし私の懐疑的な雲は晴れました。私が先の4月初旬に短期間京都を訪問した時に、この市の権



知事〔榎村正直〕と彼の顧問〔山本覚馬〕の二人と知り合いになりました。私は英学校を創立し、キリスト教と現代科学を教えたいと希望していました。その当時、人々は私が現代科学を教えることを大変期待していましたが、キリスト教にはある程度、無関心でした。しかし一部にはキリスト教が国を浄化し、より高い道徳的な水準まで高める唯一の手段であると確信していた人もいたのです。

ゴードンは同じ頃、健康保養のために京都に滞在していました。そして権知事の顧問〔山本覚馬〕と知り合いになりました。私が思うに、彼は顧問にキリスト教について多くを語らなかつたが『天道溯原』-中国に派遣された宣教師〔W. A. P. マーチン〕によって書かれた *Evidences of Christianity* を彼に与えたのです。この本は非常に説得力があり、興味ある書物で、中国語で書かれています。これは日本で聖書よりも人を改宗させるのに大きな働きをしました。なぜなら人々にとって聖書を理解する事は難解で、聖書的な表現でしばしばつまづき、その真の意味がわからなかつたからです。『天道溯原』は教養がある人や懐疑的な人の力量を問うにまさにぴったりのものであり、福音の真理に注意を払い、生命と光を求めるのに注目すべき本なのです。

ゴードンはキリスト教に関して説得力のある書物を最も教養ある思想家の一人に与えることでポイントをついたのです。私はこの興味ある人物〔山本覚馬〕についてもっと語らなければなりません。彼は京都府の客員として、また助言者として京都府政に関わっています。彼は歩けないし盲目でもあります。しかし彼の心は明晰で鋭いのです。ゴードンから彼がこの本を受け取ってしばらくして後に、私は彼を訪問しました。その時彼は私にそれは素晴らしい本だと言いました。「その本は私に大いに役立った」と言ったのです。「それはキリスト教についての私の疑問を取り払ってくれたし、私が何年も心に抱いていた難しい問題を解いてくれました。若い頃私は自分の国に何らかの奉仕をしなければならぬと思いましたが、そこで私は軍事作戦に没頭しましたが、その後国に奉仕することでは十分でないと感じ、私の努力を通して国民が正しく扱われることを希望して、法学に没頭しました。しかし注意深く観察する

と、法には限界があることに気づきました。法律には、人はある限度を超えてはいけないとあるが、厳しい制限事項がなければ続けられない。制限事項が取り払われると、人は限度を越してしまう。人は出来ればいつでも盗むし、嘘をつくし、殺人を犯すし、その他諸々のことを仕出かす。法律は彼らが心の中で考えている悪を防ぐことができない。法律は外見上の行動を非難するためか、又は正当化することができるが、内に秘められた働きを非難し正当化することはできません。<sup>5)</sup>

さて私が喜んでいるのは、私の難しい問題を解決する方法を見つけてくれたことです。キリスト教だけが人間の心の隅々にまで手が届くし刷新できるのです。私の夜は明けました。だから私には自分の知らない道が見えるのです。その道こそ私が無意識に求めていたものです」

この人は盲目なので彼はこの書物を読んでもらわざるを得ませんでした。彼は興味ある本を手に入れると、人を雇って少なくとも2度それを読んでもらいました。彼の妹はマタイ伝の日本語訳をすでに2度読んでやったと私に言いました。

この興味ある真理の追求者は身体上は盲目ですが、知的な目は盲目ではなく、見えるのです。そして彼は福音書が持ち込まれ、京都で公の場での説教がなされなくてはならないと言います。彼はトレーニング・スクールを創立するために我々を京都に招きました。デイヴィスと私はミッションの総会の後、直接そこに行ってあの盲目の人の会社の土地を学校の敷地にするために購入しました。それは素晴らしい位置にあり市の静かなところで天皇の旧居から数歩のところでした。

権知事は今東京（江戸）で年次総会に出席中ですが10日以内に戻るでしょう。その時私は京都府会に嘆願書を提出し、キリスト教が教えられる学校を創立する許可をもらうつもりです。我々はすでに学校の敷地を買い、今は、天皇の下臣を教育するために一時的に学校として使用されていた校舎を買おうとしています。まもなく返事を受け取るでしょう。

私は光の安息日に大阪で説教し、2人の面白い人を教会に迎えました。1人は市で影響力のある日本人医師です。彼は50人の学生を持ち

生理学、解剖学、化学その他を講義をしています。毎日の仕事の外に、彼は隣人を集めて新約聖書を毎日読み『Barnes' Notes』を使って説明しています。<sup>6)</sup>彼の努力を通して4、5人が既にクリスチャンになったと信じます。もう1人は木靴職人です。彼は安息日を守り始め、定期的に教会に来ています。大阪人はビジネスに注意を払い、安息日を守ることはきつい試練です。ですから彼らが安息日を守り始めると、それは彼らが改宗した確かな証拠に思えるのです。

### **Letter From Mr. Neesima**

Arima, Japan, July 7<sup>th</sup>, 1875 Mr. Neesima to friends in the United States  
[*The Missionary Herald* Vol.71-October, (1875) p.298-9.]

A letter from Mr. Neesima to friends in the United States, dated “Arima, Japan, July 7th,” gives further information in regard to the prospect at Kioto and the blind councilor there, who seems so friendly to the cause of truth. He writes:

“Now I must tell you of the encouraging opening of Kioto to our missionary efforts. You know that Kioto has been our Emperor’s seat for several centuries until 1869, and the third city in size in the Empire. As the Emperors have been the popes of our Sinto religion, and also patrons of Buddhism, there are ever so many temples in Kioto, and hence it has been regarded as the stronghold of the above-named sects.

“When I came to Osaka, and heard that some missionary was attempting to get into Kioto, I thought, ‘Kioto may be the last place to be opened to Christianity.’ But I am glad to say that my skeptic cloud is almost clearing up. When I made a short visit to Kioto in the first part of last April, I made myself acquainted with the vice-governor of that city and his adviser. I was hoping to establish an English school, where Christianity and modern science should be taught. They were then quite anxious that I should teach modern science, but were somewhat indifferent toward Christianity; although partly

convinced that Christianity is the only means to purify the nation and elevate it to a higher moral standard.

“Dr. Gordon was at the same time in Kioto for his health, and made himself acquainted with the adviser of the vice-governor. I suppose he did not say much to him about Christianity, but gave him simply a copy of ‘Tendosoogen,’—‘Evidences of Christianity,’ written by a missionary to China. It is a most convincing and interesting work, and in the Chinese language. It has done more in Japan in converting men than the Bible itself, for they find the Bible very difficult to understand, and often stumble at some Biblical statements, not being able to see their real meaning. ‘Tendosoogen’ is just the thing to meet and challenge our educated and skeptical minds, to pay attention to gospel truth and seek for life and light.

“Dr. Gordon hit the right point by giving this convincing work on Christianity to one of our best educated thinkers. I must tell you more about this interesting man. He is kept by the Kioto government as a guest and adviser. He is unable to walk, and is blind also, but his mind is clear and sharp. When I called on him, some time after he received the work from Dr. Gordon, he told me that it was an excellent book. ‘It has done me great good,’ he said. ‘It has cleared away my doubts in regard to Christianity, and has also solved a hard problem that I have kept in my mind for many years. In my younger days, I thought I must render to my country some service, and so I devoted myself to military tactics; but afterwards I found it not enough to do real service to the country; so I gave myself to jurisprudence, hoping that through my effort the people might be justly treated. But after careful observation I found there was a certain limit to jurisprudence. The law could say that the people must not come beyond such a limit, but could not be kept up unless there were severe restriction. As soon as the restriction is removed the people go beyond the limit. They do steal, lie, murder, etc., whenever they can. The law could not prevent their thinking evil in their hearts. The law could condemn or justify their outward, but not their inner

actions.

“Now I rejoice that I have found the means to solve my hard problem. Christianity alone can reach and renovate the very sprig of the human heart. The day has dawned upon me, so that I can see the path which was utterly unknown to me, and for which I have been unconsciously seeking.

“As this man is blind, he was obliged to get some friend to read this work to him. When he gets an interesting book, he employs some person to read it to him not less than twice. His sister told me that she has already read twice to him the Japanese translation of Matthew’s Gospel.

“This interesting and truth-seeking man, who is blind in his bodily eyes, but not blind in his intellectual eye, sees and says that the Gospel must be brought into and preached publicly in Kioto. He invites us to come there and establish our training-school. Mr. Davis and I went there directly after our general mission meeting and bought a lot belonging to that blind man’s company, for our school ground. It is a splendid situation and in a quiet part of the city, a few steps from the Emperor’s old residence.

“The vice-governor of the city is now attending the annual political meeting in Tokio (Yeddo), and will be back within ten days. Then I will present the petition to the Kioto Government, to allow us to establish a school where Christianity can be taught. We have already bought the school ground, and now we are trying to buy an old school-house which has been used for training the Emperor’s subjects for our temporary school. We shall soon receive our answer.

“I preached in Osaka last Sabbath, and received two interesting men to the church. One of them is an influential native physician in the city. He has fifty medical pupils, and gives them lectures, on Physiology, Anatomy, Chemistry, etc. Besides his daily task, he gathers his neighbors and reads to them every night the New Testament, using ‘Barnes’ Notes’ for explanation. Through his efforts, I trust four or five men have already become Christians. One of them is our wooden shoe-maker. He has begun to keep the Sabbath, and comes to

our church regularly. The people in Osaka give much attention to business, and keeping the Sabbath is a hard trial to them. Many are kept back from joining the church simply on this account; so when they begin to keep the Sabbath it seems a sure proof of their conversion.”

注

- 1) Letter From Mr. Neesima [*The Missionary Herald*, Vol.71-October, (1875) pp.298-9.] Arima, Japan, July 7<sup>th</sup> 1875, Mr. Neesima to friends in the United States
- 2) 『新島襄全集』第8巻 年譜編 (同朋舎、1992年)、p.145: 新島書簡の1875年7月7日付けの存在を示しているが、文面は示されていない。
- 3) A. S. Hardy, *Life and Letters of Joseph Hardy Neesima*, p.197 (1891)
- 4) 同上 p.200 (1985)
- 5) A. S. ハーディー著・北垣宗治訳「新島襄の生涯と手紙」『新島襄全集』第10巻 (同朋舎、1891年)、p.216: この部分は新島書簡として『新島襄全集』第6巻には掲載がない。  
[北垣訳]「その本はわたしにとても有益だった。キリスト教についての多くの疑問を氷解してくれたし、長年わたしを苦しめてきた難問をも解いてくれたのだ。若い頃わたしは何とかして国家につくしたいと思い、そのために兵学の研究のうちこんだ。しかしこれだけではあまりに小さすぎると感じたので、人民のために正道が敷かれることを願って法学に関心を向けた。けれども長い間研究と観察を重ねた末、法律にも限界があることをさとった。法律は障壁を築くことはできても、それは心を入れかえることができないからだ。心の中の障壁がなくなるとすぐ、ひとは盗んだり、嘘をついたり、殺したりするようになる。法律は悪しき思いを防ぐことができぬ。しかしわたしにも明け方の光がさしてきた。今やわたしには、以前には全くわからないでいた道が見える。これこそは長い間、無意識のうちにわたしが探し求めてきたものなのである。」
- 6) 同上 p.219 (1985年)  
[北垣訳]「この安息日には大阪で説教し、二人の興味深い人物を私たちの教会に受け入れました。その一人は伏見の近郊に住む有力な日本人医師〈大村達斎<sup>21)</sup>〉で、この人は五十人の弟子に生理学、化学、解剖学等を教え、毎日聖書を勉強するために近所の人々を自宅に集めています。」
- 7) 『新島襄全集』第6巻 英文書簡編 書簡番号137 (同朋舎、1985年)、p.166
- 8) D. C. Green to N. G. Clark, Hiogo March 16, 1871, *The Missionary Herald*, Vol.67-

- July (1871) p.205.
- 9) O. H. Gulick to N. G. Clark, Kobe Japan March 18, 1871, *The Missionary Herald*, Vol.67-July (1871) p.206; Gulick は最初にヘボン (Hepburn) に横浜であったことと、日本の第一印象を伝え、最初に内陸部の古都 Kyoto での伝道希望を述べる。
  - 10) Ten Protestant Missions in Japan to the Missionary House, Yokohama Japan May 22, 1871, *The Missionary Herald*, Vol.67-October (1871) p.292.
  - 11) O. H. Gulick to N. G. Clark, July 1, 1871, *The Missionary Herald*, Vol.67-October (1871) p.294.
  - 12) O. H. Gulick to N. G. Clark, Kyoto Japan May 13, 1872, *The Missionary Herald*, Vol.68-September, (1872) p.274.
  - 13) O. H. Gulick to N. G. Clark, Kyoto Japan June 15, 1872, *The Missionary Herald*, Vol.68-September, (1872) p.274.
  - 14) J. D. Davis to N. G. Clark, Kobe Japan June 15, 1872, *The Missionary Herald*, Vol.68-September, (1872) p.274.
  - 15) J. C. Berry to Clark, Kobe Japan June 17, 1872, *The Missionary Herald*, Vol.68-September, (1872) p.275.
  - 16) 河野仁昭、『新島襄への旅』(京都新聞社、1993年)、p.145
  - 17) 鍋木路易、『新島研究』第86号(1995年)、p.59
  - 18) ポール・F・ボラー(著)北垣宗治(訳)『アメリカンボードと同志社1875-1900』(新教出版社、2007年)、p.25-、p.38-
  - 19) 本井康博『アメリカン・ボード200年ー同志社と越後における伝道と教育活動』(思文閣出版、2010年)、p.19
  - 20) 「新島襄の生涯と手紙」『新島襄全集』第10巻(同朋舎、1985年)、p.423
  - 21) 『改訂増補山本覚馬傳』(京都ライトハウス、1976年)、p.405
  - 22) The Rev. M. L. Gordon, Thirty Eventful Years—The Story of the American Bord's Mission in Japan 1869-1899, p.21, Congregational House (1901)
  - 23) 『同志社百年史』資料編I(1979年)、p.7; 『新島襄全集』第8巻 年譜編(同朋舎、1992年)、p.144; 『新島襄全集』第1巻 教育編(同朋舎、1992年)、p.6 & p.612
  - 24) 森永長壹郎「J・D・デイヴィスとN・G・クラークの往復書簡(3)」、『同志社談叢』第26号(2006年)、p.81
  - 25) 竹内力雄「『山本覚馬』覚え書(四)」、『同志社談叢』第24号(2004年)、p.97

注：[ ] 内は著者のコメントを示した。

### 追記

この資料紹介の校正時に井上勝也氏の著書『新島襄 人と思想』（晃洋書房、1990年、p.100の下から5行目～）に *Missionary Herald* 1875年10月号の紹介で、新島の書簡の全訳（pp.101-103）をされているのを見つけました。ただし、英文の紹介はされていません。